



公益社団法人

# 日本水産資源保護協会

## 季報

2025年 **秋** 通巻584

第18巻 第3号

### C O N T E N T S

#### ◆事業報告 ..... 3

令和6年度漁村研究実践活動助成事業  
広島県福山市横島漁業協同組合 ヒオウキガイ養殖試験  
令和6年度水産資源保護啓発研究事業(巡回教室)  
香川県水産試験場 瀬戸内海・四国ブロック魚病検討会

#### ◆事業の紹介 ..... 11

令和7年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業  
持続可能な水産業への歩みを加速「MEL認証証書授与式(東京)開催

#### 東北復興水産加工品展示商談会2025 ..... 2

#### 保護協会イニシャルトーク ..... 13

#### 保護協会の認定機関・お知らせ ..... 14

#### 「三陸・常磐うみうまフェア」産地見学ツアー ..... 15

#### フードストアソリューションズフェア ..... 16



令和7年8月20日、TFTビルにおいてマリン・エコラベル・ジャパン（MEL）の認証証書授与式を開催しました。（詳細は12ページ）

令和7年度  
復興水産加工業等販路回復促進指導事業

# 東北復興水産加工品展示商談会 2025(仙台市)

～繋がる・繋げる展示商談会～

復興水産加工業販路回復促進センターでは、東日本大震災から14年が経過し、生産体制は整ったものの、未だ売上回復が遅れている三陸・常磐において、水産業界全体の復旧・復興、ならびに販路開拓・情報発信の拡大を図るべく、“繋がる・繋げる展示商談会”をテーマに掲げた「東北復興水産加工品展示商談会2025」を9月30日、10月1日に仙台国際センター展示棟で開催しました。

出展された約130社の三陸・常磐地域の水産事業者等においては、独自の製法・味・技術で製造した“うみ”の“うまいもの”を、日本全国のバイヤーに向けて発信しました。

また、水産業界の課題解決をテーマとした各種セミナーやアドバイザー相談コーナー、新商品&開発中商品プレゼンコーナーも設置された。

なお、2日間の来場者は、3,750名でした。



### ヒオウギガイ養殖試験

広島県福山市内海町 1102-1  
横島漁業協同組合

#### I 研究の目的と内容

##### 1. 研究目的

###### (1) 研究グループの概要

横島漁業協同組合の組合員5名が中心となり、ヒオウギガイ養殖試験に取り組んでいる。

横島漁協では底びき網漁業が盛んに行われてきたが、ここ数年、不漁が続いており、それを補うために、副業的に、カキ養殖、アサリ養殖、ワカメ養殖を始めた者が少なくない。

ヒオウギガイもその一環として、養殖試験を行っている。

###### (2) 研究の動機と目的

令和4年からヒオウギガイの養殖試験に取り組んでいる。

これまで、生育状況の把握を行うとともに、種苗の確保、低塩分対策、低水温対策等の課題に対し、文献や他県のヒオウギガイ養殖業者への聞き取り等により、課題を解決してきた。

これまでに養殖試験を行った種苗は、殻高 15mm の小型種苗と、殻高 65mm の大型種苗である。

殻高15mmの小型種苗は秋に導入し、出荷サイズ (80mm以上を目標) まで生育するのに1年以上を要し、その間の歩留まりの低下、低水温となる冬期を2回過ごすことによるへい死リスクが、大きな課題となった。

また、65mmの大型種苗は夏に導入し、年明けには出荷サイズ (80mm以上) になるものの、種苗単価が高いといった欠点がある。

そこで、ヒオウギガイの比較的単価が低い中間種苗 (50mm 前後) を、低水温対策として冬期を過ぎた春に導入し、4分目の丸カゴに収容し、海上にある既存のカキ筏に垂下し、年内に出荷サイズ (殻長 80mm 以上) にまで生育可能かを探る。

##### 2. 研究内容及び研究方法

###### (1) 研究項目

サイズの異なる中間種苗と、養殖カゴへの収容密度の違いによる生育状況を確認することで、当地区でのヒオウギガイの最適な養殖方法・養殖密度を探る。

###### (2) 研究方法

50mm サイズ、45mm サイズのヒオウギガイの中間種苗を導入し、生育状況を確認する。

また、45mm サイズにおいては、カゴ当たり 50 個と 25 個と異なる密度で、ヒオウギガイを収容し、生育状況の違いを確認する。



## II 研究結果

### 1 試験の開始

令和6年4月12日に愛媛県宇和島市に、50サイズ、45サイズの高ウギガイの中間種苗を取りに行き、50サイズ（平均殻高:52.1mm、平均重量:23.6g）を53個、45サイズ（平均殻高:44.5mm、平均重量:14.4g）を50個、収容密度を変えた45サイズ（ハーフ）（平均殻高:44.1mm、平均重量:14.0g）を25個、それぞれをカゴに入れ、カキ筏に垂下した。



輸送時のストレス等を勘案し、到着後直ちに4分目のカゴに入れてカキ筏に垂下

### 2 試験経過

試験開始から9ヶ月に亘る、3試験別の生残数、重量、殻高の計測結果は、次のとおり。

		R6.4.16	R6.5.15	R6.6.21	R6.7.24	R6.8.21	R6.9.18
50 サイズ	個 数	53 個	53 個	53 個	51 個	45 個	41 個
	平均 重量	23.6 g	29.4g	46.2g	60.8g	62.2g	74.4g
	平均 殻 高	52.1mm	52.6mm	58.3mm	66.0mm	66.7mm	68.4mm
45 サイズ	個 数	50 個	49 個	49 個	48 個	47 個	44 個
	平均 重量	14.4 g	19.2g	32.2g	50g	51.1g	57.5g
	平均 殻 高	44.5mm	46.3mm	53.1mm	60.9mm	64.7mm	64mm
45 サイズ (ハーフ)	個 数	25 個	25 個	25 個	25 個	21 個	20 個
	平均 重量	14.0 g	18.4g	38g	46g	47.6g	62.5g
	平均 殻 高	44.1mm	46.6mm	56.5mm	61.4mm	60.5mm	63.7mm
測定時の水温		16.6℃	18.9℃	23.7℃	27.3℃	31.2℃	31.0℃

		R6.10.21	R6.11.18	R6.12.20	R7.1.21	生残率	
50 サイズ	個 数	36 個	34 個	33 個	31 個	58.50%	
	平均 重量	80.6g	110.3g	128.8g	132.3g		
	平均 殻 高	72.5mm	71.0mm	79.5mm	74.7mm		
45 サイズ	個 数	37 個	37 個	37 個	33 個	66.00%	
	平均 重量	75.7g	86.5g	101.4g	106.1g		
	平均 殻 高	68.1mm	67.4mm	71.1mm	71.9mm		
45 サイズ (ハーフ)	個 数	20 個	18 個	17 個	17 個	68.00%	
	平均 重量	87.5g	94.4g	132.4g	147.1g		
	平均 殻 高	68.7mm	73.1mm	69.8mm	71.7mm		
測定時の水温		25.4℃	21.1℃	14.0℃	11.2℃		

### 3 試験結果

#### (1) 生残率

令和7年1月の生残率は、「45 サイズ (ハーフ)」が68%と最も高く、「50 サイズ」が58.5%と、最も低かった。

サイズ、収容数、ともに低い方が、生残率が高かった。

また、海水温が上昇した、8月から、へい死が増えた。

#### (2) 殻高

試験開始から9ヶ月で、「50 サイズ」は74.7mmと1.4 倍となり、「45 サイズ」は収容密度が半分の「45 サイズ (ハーフ)」とともに、約72mmと1.6 倍となり、受入時の殻高が小さい方が生育が良い結果となった。

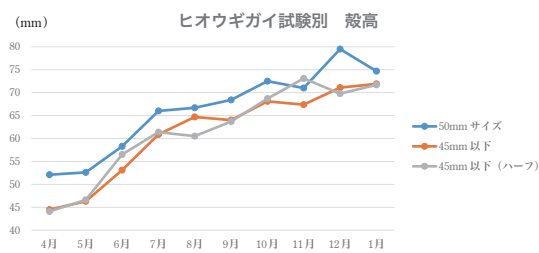
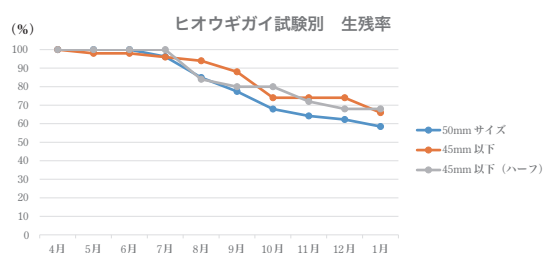
また、収容密度別の成長には、違いが見られなかった。

#### (3) その他

フジツボ、牡蠣等の付着物が、非常に多かった。



フジツボ、カキ等の大量の付着物(令和7年1月21日撮影)



### III 考察

- 出荷サイズ (80mm 以上) になる前に低水温期を迎えたことから、より大きな 55mm 以上の中間種苗を導入することや、2週間ほど前倒した3月下旬に導入することが望ましいが、種苗購入単価が上がることや、導入の前倒しによる低水温を考慮する必要があり、導入サイズや時期等を再検討する必要がある。
- 収容密度の違いによる、生残率や殻高に差が見られなかったことから、1カゴ当り 50 個を収容しても、密度的には問題がないものと推測される。
- 夏期のへい死が多かったことや、フジツボ、カキ等の付着物が多かったことから、垂下水深や垂下海域等を再検討する必要がある。

令和6年度 水産資源保護啓発研究事業(巡回教室)

令和6年度瀬戸内海・四国ブロック魚病検討会「世界と日本でのエビ類の疾病」

香川県水産試験場

開催日時 令和6年9月26日(木) 13:30～

開催場所 サンポートホール高松 51会議室

講師氏名 伊丹利明 氏(福山大学生命工学部海洋生物科学科 教授)

講演要旨

世界と日本でのエビ類の疾病について

エビ類の疾病は、OIE (WOAH) のリスト疾病が10種、日本の特定疾病が10種 (OIE と一部異なる)、うち日本での発生事例が3種である。東南アジアでは、日本へ未侵入の疾病も頻繁に発生しており、持込が懸念される。以前は船のバラスト水が原因と考えられる疾病がパナマで感染した事例もある。

特に注意が必要と考えられる疾病はEHP (中腸腺微胞子虫症) とDIV1 (仮称: 十脚目イリドウイルス病) である。EHP は、OIE のリスト疾病や特定疾病でないが、2009年にタイのウシエビで記載され、中国、インドネシア、マレーシア、ベトナム、インド等でも報告された。経済損失は急増しており、現在では重大な脅威となっている。へい死は少ないが、ビブリオ病と併発すると被害が大きい。DIV1 は、OIE のリスト疾病である。中国では2014年以降発生し、2017～2018年には16省のうち11省で検出されている。宿主範囲が広いと、甲殻類の浮遊幼生や動物プランクトンに感染して感染が拡大する懸念がある。

近年、国内でも養殖が増えているバナメイエビであるが、国内産の種苗を用いて養殖すべきである。

クルマエビではPAVに対するDNAワクチンが有効であることが証明されている。ウイルスフリー親エビを個体別に採卵して人工種苗を生産し、家系毎に耐病性を評価して、ウイルスを持たず耐病性が高く、成長の早いクルマエビの家系を育成することが可能である。今後、このような家系の確立と維持が重要である。

受講者数

三重県	1名	和歌山県	1名	大阪府	1名	兵庫県	1名	岡山県	1名	広島県	1名
山口県	2名	徳島県	2名	愛媛県	1名	高知県	1名	香川県	5名	自治体以外	6名



伊丹教授による講義の様子



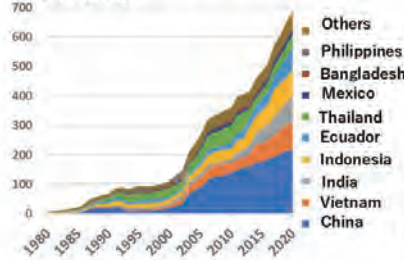
講演資料(抜粋)



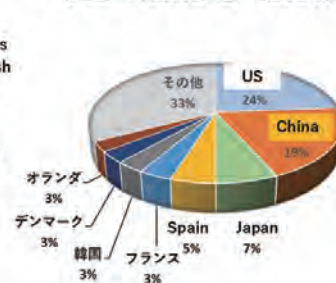
### Global Shrimp Culture Production

#### 養殖エビの生産量

(X 10<sup>4</sup> tons)



#### 各国の輸入割合 (2020)



2020年度の全生産量: 6,860,000 tons

Aquaculture target species: 652 shrimp

No. 1 in production: *Litopenaeus vannamei*

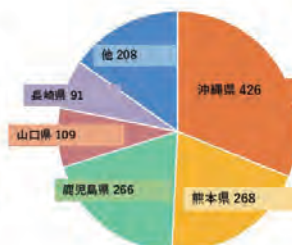
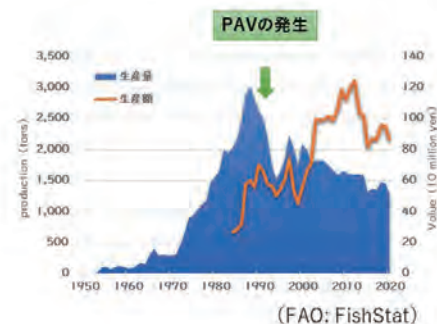
全輸入量: 316万 tons

(FAO: FishStat)

(FAO: FishStat)

### 日本におけるクルマエビの生産量

#### 2020年度の各県の生産割合



Total production: 1,369 tons

(農林水産省:令和2年漁業・養殖業生産統計)

## エビの疾病に関するOIE (WOAH) のリスト

(<http://nria.fra.affrc.go.jp/sindan/riskprofile/index.html>)

Names of diseases	Listed by OIE	Designated diseases in Japan	Reported in Japan
WSD : White spot disease PAV	○	-	○
YHD : Yellow head disease イエローヘッド病	○	○	-
IHHN : Infectious hypodermal and haematopoietic necrosis 伝染性皮下出血器壊死症	○	○	-
TS : Taura syndrome タウラ症候群	○	○	-
Infusional baculovirus 感染性バクテリウムウイルス	-	○	-
Spherical baculovirus モノミクサウイルス	-	○	-
IMN : Infectious myonecrosis 伝染性筋壊死症	○	○	-
White tail disease ホワイトテール病	○	-	-
CMD : Covert mortality disease エビの潜伏死病 (CMD)	-	○	-
GAV : Gill associated virus disease 鰓随伴ウイルス病	-	○	-
DIV 1 : Decapod iridescent virus 1 十脚目イリドウィルス病 (仮称)	○	-	-
NHP : Necrotising hepatopancreatitis 壊死性肝膵炎	○	○	-
AHPND : Acute hepatopancreatic necrosis disease 急性肝膵臓壊死症	○	○	○
Hepatopancreatic microsporidiosis 中腸腺微胞子虫症 (HPM, EHP)	-	-	-
Tremor Disease 振戦病	-	-	-
Crayfish plague ザリガニのアファノマイセス症	○	-	○
Total	10	10	3

## 東南アジア各国でのエビの疾病の発生状況 (2022~2023年)

国名	四半期	2022年				2023年				2024年	
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2
台湾	WSSV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	AHPND	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IMNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	EHP	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	DIV 1	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
フィリピン	WSSV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IHHNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	AHPND	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IMNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	EHP	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
インド	WSSV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IHHNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	AHPND	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IMNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	EHP	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
バングラデシュ	WSSV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IHHNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	AHPND	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IMNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	EHP	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
タイ	WSSV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IHHNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	AHPND	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IMNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	EHP	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ベトナム	WSSV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	AHPND	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	EHP	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
オーストラリア	WSSV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	IHHNV	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

Network of Aquaculture Centres in Asia-Pacific (NACA)  
Reported Aquatic Animal Diseases in the Asia-Pacific Region in 2022-2024  
Crustacean diseases

## Enterocytozoon hepatopenaei Infection (EHP, HPM: 中腸腺微胞子虫症)

### Enterocytozoon hepatopenaei Infection (EHP, HPM: 中腸腺微胞子虫症)



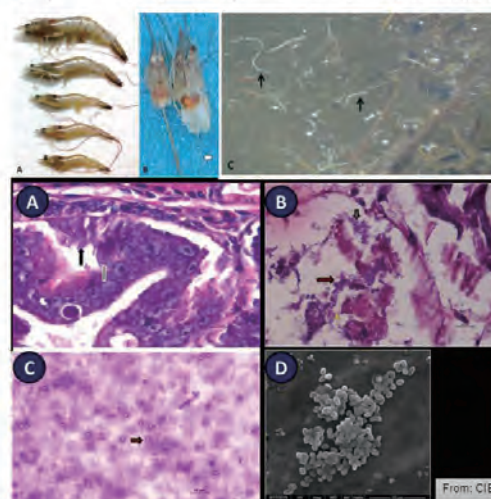


## EHP, HPM: 中腸腺微胞子虫症

- 2001年に未知の病原体として初めて報告され、EHPは2009年に(Tourtip et al., 2009)によってタイの *Penaeus monodon* で記載され、特徴付けられました (Tangprasittipap et al., 2013)。
- 続いて、中国、インドネシア、マレーシア、ベトナム、インドなどの東南アジア諸国の *L. vannamei* 養殖におけるEHP感染が報告されました。
- EHP感染による経済損失は急速に増加しており、現在ではエビ養殖における重大な脅威と見なされています。
- エビ養殖におけるEHP感染の主な臨床徴候は成長遅延で、これがサイズのばらつきを増加させます。エビには物理的または目に見える異常は見られません。

Tangprasittipap et al.: The microsporidian *Enterocytozoon hepatopenaei* is not the cause of white faeces syndrome in white leg shrimp *Penaeus (Litopenaeus) vannamei*. BMC Veterinary Research 2013 9:139.

## タイ、ベトナム、インドで急激に拡大するEHP



A: 池入れ90日。サイズのバラツキが大きい。  
B: 空の腸管  
C: 池に浮く白い糞。

A: 肝臓上皮の胞子  
B: 肝臓上皮細胞の剥離  
C: 糞中の胞子  
D: 胞子の走査電顕像

☆1ヘクタール当たり6トン (0.6kg/m<sup>2</sup>) の生石灰 (CaO) で消毒。

From: CIBA e-publication No.29; January 2016

## Aquaculture Research

Aquaculture Research, 2016, 1–5

doi:10.1111/anr.13078

### SHORT COMMUNICATION

#### Quick report on prevalence of shrimp microsporidian parasite *Enterocytozoon hepatopenaei* in India

Karthikeyan Kesavan<sup>1</sup>, Ravi Mani<sup>2</sup>, Itami Toshiaki<sup>1</sup> & Raja Sudhakaran<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Aquaculture Biotechnology Laboratory, School of Biosciences and Technology, VIT University, Vellore, Tamil Nadu, India  
<sup>2</sup>Centre for Ocean Research, Sathyabama University, Chennai, Tamil Nadu, India  
<sup>3</sup>Faculty of Agriculture, University of Miyazaki, Miyazaki, Japan



Contents lists available at ScienceDirect

Aquaculture

journal homepage: [www.elsevier.com/locate/aquaculture](http://www.elsevier.com/locate/aquaculture)



#### Rapid and sensitive real-time loop mediated isothermal amplification for the detection of *Enterocytozoon hepatopenaei* of shrimp

K. Karthikeyan<sup>a</sup>, Ankith Sharma<sup>a</sup>, T. Mekata<sup>b</sup>, T. Itami<sup>c</sup>, R. Sudhakaran<sup>a,\*</sup>

<sup>a</sup>Aquaculture Biotechnology Laboratory, School of Biosciences and Technology, VIT University, Vellore 632 014, Tamil Nadu, India

<sup>b</sup>National Research Institute of Aquaculture, Aomori Fisheries Research and Education Agency, Min 516-0195, Japan

<sup>c</sup>Faculty of Agriculture, University of Miyazaki, 1-1, Gokushancho-1-nishi, 889-2192 Miyazaki, Japan



10

## Infection with Decapod Iridescent Virus 1 (DIV1、十脚目イリドウイルス病 (仮称))

### Infection with Decapod Iridescent Virus 1 (DIV1、 十脚目イリドウイルス病 (仮称))

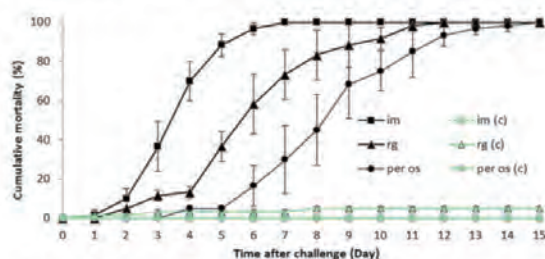


図 ウイルス感染エビの抽出物のろ液を用いた人為感染実験における累積死亡率の変化。im：筋肉注射、rg：肛門からの注入、per os：経口投与

Liang Qiu et al., 2027, DOI:10.1038/s41598-027-10738-8

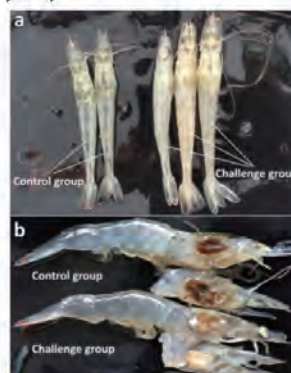


図 DIV1で*L. vannamei*に人為感染試験を行った結果。  
(a) 外観症状、(b) 肝脾臓

### Nested PCRによる養殖エビからのDIV1の検出

Shrimp species	Negative	Positive	Total	Positive rate
<i>L. vannamei</i>	486	89	575	15.5%
<i>F. chinensis</i>	28	5	33	15.2%
<i>Mb. rosenbergii</i>	5	5	10	50.0%
<i>Mp. japonicus</i>	7	0	7	0.0%
Total	526	99	625	15.8%

Liang Qiu et al., 2027, DOI:10.1038/s41598-027-10738-8

## まとめ

1. 注意しなければいけないエビの疾病は、**中腸腺微胞子虫症 (EHP, HPM)**と**十脚目イリドウイルス病 (DIV1)**
2. **海外産の種苗の輸入**では、各種の疾病の発生に注意する。  
たとえ、無病証明があったとしても、、、
3. **バナメイエビ**の養殖には**国内産の種苗**を用いる。
4. エビの疾病に対しても**ワクチン**の開発の可能
5. SPFクルマエビから**耐病性/高成長の家系**の作出が可能



# 事業の紹介

## 令和7年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業

2年目を迎えた「みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業」では、ICT 遊漁券システムの導入や釣り人と連携した漁場管理といった、これまでの事業の蓄積を活用し、地域に密着した人材をコーディネーターとして配置、釣り人との連携やゾーニングによる漁場管理の拡大、ICT 遊漁券システムにより収集した遊漁者の動向等のデータを活用した漁場管理の高度化、ICT 遊漁券アプリを活用した遊漁者の呼び込みなど、効率的な漁場管理や内水面漁業活性化の方法の検討や実行を進めるための取組が行われています。

なお、採択された団体は、以下のとおりです。（ITC 遊漁券の導入のみの団体を除く）

### コーディネーターによる取組団体一覧

団体名	活動計画内容
青森県内水面漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター2名設置 (2)川釣りを軸とした地域づくりのモデル創出：ゾーニングによる特設釣り場の設置 (3)青森の川や自然を愛でるパートナーづくりの試行 (4)電子遊漁券データの活用とデジタルマップの整備 (5)ホームページ・SNS等による情報発信
宮城県内水面漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター1名設置 (2)ミニシンポジウム&フィールドワークによる漁協の価値向上と連携促進 (3)検討会開催
米代川水系サクラマス協議会（秋田県）	(1)コーディネーター2名設置 (2)高精度ドローンを活用した漁場管理の積極的な効率化 (3)米代川での水難事故を最小限に抑えるために危険情報デジタルマップの作成 (4)危険情報デジタルマップの作成 (5)米代川のファンづくりに向けて
山形県内水面漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター3名設置 (2)負担の少ない賦課金・行使料の徴収システムの運用拡大 (3)ICT遊漁券システムの活用と機能追加による情報整理・釣場デジタルマップの積極的運用 (4)サクラマスの漁場管理と遊漁振興
栃木県漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター1名設置 (2)新たなゾーニングの展開 (3)ICT遊漁券の販売データを活用した遊漁者向けデジタルマップのアップデート (4)釣り具レンタル・フィッシングガイド事業の体制整備 (5)企業を対象とした漁協活動体験プログラム (6)アユスプロジェクト
新潟県内水面漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター1名設置 (2)小委員会の設置 (3)ゾーニングの把握とデジタルマップの整備 (4)電子遊漁券データの活用 (5)ホームページ・SNS等による情報発信・観光との連携
長野県内水面漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター1名設置 (2)デジタル地図整備による漁場の「さらにもっと見える化」を推進 (3)県内釣り情報などのデジタル発信 (4)組合員及び遊漁者アンケート実施
愛知県内水面漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター2名設置 (2)川釣り普及啓発事業と漁場管理の組織化 (3)ゾーニングの把握とデジタルマップの整備 (4)電子遊漁券データ等の活用 (5)ホームページ・SNS等による情報発信 (6)検討会（事業のものと、釣り人との連携に関する2種類）の開催
三重県内水面漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター2名設置 (2)活動組織の構成 (3)ゾーニングの推進 (4)三重県内水面漁連及び各漁協の公式SNSアカウント・ホームページの運用強化 (5)釣りイベントの開催：「みえ鮎ルアー塾」 (6)「見える化」の更なる推進 (7)フィッシングショー大阪出展 (8)外部有識者との検討会開催
京都市内水面漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター1名設置 (2)ゾーニングや釣り人と連携した漁場管理 (3)ICT 遊漁券システム活用した漁場管理の高度化、内水面漁業の活性化：遊漁カード（優待付遊漁券）の試行 (4)検討会の開催 (5)フィッシングショー大阪出展
和歌山県内水面漁業協同組合連合会	(1)コーディネーター1名設置 (2)ゾーニングと釣り人との連携による漁場管理の工夫 (3)「わかやま友釣り塾」「友釣り体験教室」の実施 (4)企業連携による研修プログラムの試行 (5)ICT遊漁券とデジタル情報活用による漁場管理の高度化 (6)みんなでやるぞ推進検討会



## 持続可能な水産業への歩みを加速 「MEL認証証書授与式(東京)開催」

2025年8月20日TFTビル(東京都江東区)において、日本水産資源保護協会(日水資)と海洋生物環境研究所(海生研)は、MEL(マリン・エコラベル・ジャパン)の認証証書授与式を行いました。今回新たに認証を取得し授与式に参加したのは、養殖5社、流通加工段階(CoC)8社の計13社で、水産業界の持続可能性に向けた取り組みがさらに広がりを見せています。

授与式では、高橋正征会長から各事業者へ証書が授与されました。その後、会長より「MEL認証を契機に強い自負心を持ち、生産や流通に精進し、より高い目標を掲げて漁業と養殖業の持続的な発展を目指してほしい。」との激励とともに「私共認証機関はMEL基準の意味と必要性をしっかりと伝えていきたい。」と挨拶がありました。また、来賓の水産庁・吉川千景課長補佐からも、地球環境問題への関心の高まりを受け、水産エコラベル認証への国内外での関心が高まる中、より多くの消費者へMEL認証を知っていただき、その消費が進むことで機運が高まり認証が広がることと、MELの普及が水産物の輸出の促進に貢献することへの期待とともに、水産物の持続的利用を推進し、官民連携で認証を進めていくと力強い言葉をいただきました。

授与者からは、認証取得に対し下記コメントが語られました。

- 「昨今海水温の上昇、魚病のリスク等が起きている中で責任ある養殖を行っていくために、生産者の意識を高める意味で取得した」  
(養殖認証 / ユスサステナブリ生産グループ)
- 「スーパーマーケットとして、MEL認証水産物の販売を強化し、消費者への認知を広げるのが最大の使命と考えている。今後MELがお客様に浸透するよう頑張る」  
(CoC認証 / ライフコーポレーション)

最後に、MEL協議会の垣添直也会長から、2016年12月の設立から来年で10年を迎えるMEL認証の展望を述べられ授与式を締めくくりました。

本協会も、MEL認証を通じて持続可能な水産業の普及に引き続き取り組んでまいります。

認証取得事業者は下記のとおり。

## 「養殖認証 Ver.2.1」

福岡市漁業協同組合 唐泊支所(カキ)  
黒瀬水産株式会社(カンパチ)  
辻水産株式会社(マダイ・シマアジ)で2認証  
ユスサステナブリ生産グループ(ブリ)  
富士山サーモン株式会社(ニジマス)

## 「CoC」

株式会社ライフコーポレーション  
株式会社ジースリー  
第一水産株式会社  
株式会社ニシショウ産業  
日本石花株式会社  
マルハニチロ株式会社  
株式会社海産物のきむらや  
株式会社UTAKICHI



# イニシャルトーク



## 私にとっての水産

### 【KS】パック寿司の地域差

転職のため、この9月に上京をいたしました。

それまでの本拠地は遥かなる北海道。魚食のメッカです。

とはいえ切り詰めた食費でどうにか成り立っていた食生活であるからして特別に舌が肥えているということはないものの、それゆえ人一倍、安価で良質なお魚が食べられる北海道の食環境にはありがたみを感じていました。

よく、「北海道はスーパーのパック寿司でも美味しい」「北海道の回転寿司は本州の“回らないお寿司”に相当する」というような誉め言葉（一種の対立構造）を耳にしました。私も、そんな風に北海道がやや神格化されているのを見るにつれ、ただの一消費者のわりには鼻が高かったのを自覚しています。

ところがいざやってきた東京で「どれ、味を見てやるか」くらいの上から目線でパックのお寿司に手を伸ばしたところ、明らかに脂が乗っているし、色も良い。北海道スーパーの相場と比べて、数割増しで値段が乗っているということでもない。この見立ては妻も同様でしたから、どうやら私の目が節穴であることだけが理由ではなさそうです。その日は上京の記念にパック寿司をいただき、その美味しさに驚くとともに、30余年の北海道生活で積みあがった「北海道神話」のようなものが私の中で崩れていくのを感じました。

もちろん、北海道が魅力的で豊かな食糧資源に恵まれていることについては今さら議論の余地はありません。高いお金を出せば、より上質で新鮮なお寿司が食べられるという噂も聞いたことがあります。ところが流通加工技術の向上か、大手スーパーの寿司システムが発達しているのか。少なくとも身近に手の届く範囲では、地域差はほとんど感じられないということを身をもって実感しました。

私も水産に携わる一人として、（特に、日本の水産資源を守り、後世に継承する組織の一員としては）日本全国どこに住んでいてもスーパーで手軽に美味しい魚食に手が届く、そんな環境が続くよう微力ながら尽力したいと感じた次第です。

（ちなみに、東京の気候を見込んで掛布団やコートを断捨離して上京に挑んだものの、これを書いている10月末の時点でしっかり肌寒くて驚いています。つくづくステレオタイプな考え方は良くないなと痛感いたしました）

次にお鉢が回ってくる頃には、東京の回転寿司について現地調査が済んでいる見通しです。

### 【NK】対馬での思い出

私は前職で、対馬という離島で3年間生活していた経験があります。水産関係者ならご存じの方も多いかと思いますが、対馬は長崎県に属する、人口約2.5万人の離島で、日本全国から釣りを目的で訪れる人も多い釣りの聖地でもあります。

そんな対馬で生活することになった私は、知り合いがほとんどいない中、知らない土地で初めての一人暮らしで心細い気持ちでいました。しかし、数少ない知り合いが釣りに誘ってくれたことをきっかけに知り合いが増え、いつのまにか固定のメンバーで週1、2程度仕事終わりに集まり、釣りをするようになりました。結局3年間自分で釣り上げることはほとんどありませんでしたが（途中から諦めていました）、釣り仲間がイカやアジを釣ったときにはそのまま誰かの家で捌いて、深夜まで飲み食いをするといった、夏休みのような日々を過ごしておりました。不安だった離島一人暮らしでしたが、釣りがきっかけで仲間ができ、とても楽しく充実した3年間を送ることができました。

また、対馬生活では、スーパーで鮮魚コーナーを眺めるのも楽しみのひとつでした。地元ではなかなか手に入らないような食材が置いてあり、一見どうやって食べるのか分からないものも。一度好奇心で「カメノテ」を購入してみました。名前のとおり亀の手のような見た目で食べ方も調理方法もわかりませんでした。インターネットで調べながら調理し、少し勇気がいりましたが食べてみると味はエビのような味でおいしかったことを覚えています。ほかにあなごが有名なお店に定期的に通ったり、ランチでイスズミのメンチカツ（過去にFish-1グランプリを受賞されています）を食べたり、職場でマグロをいただいたり…思い返せば水産づくりの3年間でした。

東京へ移住して数か月、都会での生活に疲れたときはおいしいごはんと豊かな自然を求めて、また対馬へお邪魔しようかなとひそかに考えています。



(公社) 日本水産資源保護協会は以下の規格の認証機関として認められています。

MELJapan:『マリン・エコラベル・ジャパン』(Marine Eco-Label Japan)



FAO (国際連合食糧農業機関: Food and Agriculture Organization of the United Nations) の持続可能な漁業の認証のガイドラインに基づき、ISO 認証の仕組みに沿った認証制度です。

\*スキームオーナー「一般社団法人 マリン・エコラベル・ジャパン協議会」

\*規格とその認証の仕組みを所有し、運営・維持する主体

AEL:『養殖エコラベル』(Aquaculture Eco-Label)



持続可能な養殖業の発展に資するため、FAO の養殖認証に関する技術的ガイドラインに基づき、ISO 認証の仕組みに沿った認証制度です。

スキームオーナー「一般社団法人 日本食育者協会」



#### ● 受託検査のご案内 ●

公益社団法人日本水産資源保護協会では、水産分野のさまざまな検査を行っています。

当協会では、以下の検査を受託しています。検査の申し込み・詳細は下記までお問い合わせ下さい。

#### ● 錦鯉関連検査

1. コイヘルペスウイルス (KHV) PCR 検査
2. コイ科魚類特定疾病検査
3. 中国向け輸出錦鯉検査

#### ● 種苗検査

1. ヒラメのクドア (*Kudoa septempunctata*) 検査

#### ● 輸出前検査

1. 中華人民共和国向け輸出活水産物の目視検査
2. 台湾向け輸出水産動物の魚病検査
3. 大韓民国向け輸出水産動物等の魚病検査
4. カナダ向け輸出餌料用天然マサバ (内臓付き) の目視検査
5. ロシア向け輸出水産食品魚病検査 (活魚介類検査)
6. ベトナム向け輸出活水産動物の検査

#### ● 上記以外の臨時検査 (令和元年から令和 6 年 12 月まで)

魚類: カンパチ、チョウザメ類、ニジマス、ナマズ、フナ、キンギョなど

貝類: アワビ類など

#### ● 検査方法

農林水産省「特定疾病等対策ガイドライン」、国際獣疫事務局 (WOAH) 監修の疾病診断マニュアルなどに準拠した方法を用います。検査結果は日本語表記あるいは日英文併記の結果報告書を発行します。

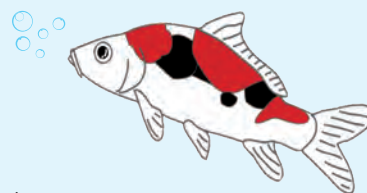
#### ● 受託検査に関するお問い合わせ・資料請求

公益社団法人 日本水産資源保護協会 受託検査担当

TEL: 03-6280-5033 FAX: 03-6280-5034

E-mail: kensa@fish-jfrca.jp

ホームページ: <http://www.fish-jfrca.jp/>



＜編集後記＞ 10月は、大きめの美味しいサンマが、久しぶりに求め安い値段でお店に並んでくれたおかげで、何度も秋の味覚を堪能することができました。残念ながら出向くことはできませんでしたが、目黒のサンマ祭りも大盛況のようでした。テレビで見ると、まだ夏を感じる暑さの中で、半そで姿で秋の味覚を楽しんでいる姿が画かれていました。

そんな今年の暑さも、11月の足音が聞こえてきたとたん、晩夏から一気に晩秋に移り変わったように上着、場合によってはコートが必要なほど気温が下がり、ようやく秋らしいかっこうで秋の味覚を楽しめるようになってきました。

そろそろコンビニにも、すり身をふんだんに使った具材の入ったおでんが出てくるころです。水産加工業者の皆さんが丹精込めて作られた具材が、笑顔あふれる夕食に並ぶのもあと少しです。

公益社団法人日本水産資源保護協会 季報担当



## 「三陸・常磐うみうまフェア」産地見学バスツアー

この事業は、被災地以外の水産・流通関係者・小売事業者等が、被災地水産加工業等を見学することで、被災地で水揚げ・加工される水産物に対する正しい情報や、水産加工業の復興の取組への理解を促すことを目的に実施しています。

今年度は、国産水産物流通促進センターの 프로모ーション事業として開催される「三陸・常磐うみうまフェア」に参加される10社62名の飲食店関係者を対象として、仙台市で開催された「東北復興水産加工品展示商談会2025」を含め、宮城県石巻方面と福島県相馬市・いわき市方面の二班に分かれて実施されました。

参加した皆様には、三陸・常磐の加工業者の想いや製造現場、商品にまつわるストーリーを、現場見学に加え、意見交換会や試食を通じて感じていただいたことで、メニュー開発等に生かし、2月に行われるフェアをより一層有意義なものにしていただけのもとの確信しています。



## フードストアソリューションズフェア2025

令和7年度復興水産加工業等販路回復促進事業として、東日本大震災により失われた販路回復等を目的に、令和7年9月4日～5日にインデックス大阪で開催された「フードストアソリューションズフェア2025」に復興ブースを設け、三陸・常磐の水産加工業者16社が出展しました。

開催前日に出展者の皆様には、水産物の安全性、昨今の関西消費者・バイや同行とスーパーマーケットの繋がり方をテーマとした講習会を受講していただき、その学んだ内容を「展示商談会」において、実践していただきました。



令和7年11月15日発行

発行 — 公益社団法人 日本水産資源保護協会

●連絡先

〒104-0042

東京都中央区入船3-10-9

新富町ビル5階

TEL 03(6280)5033

FAX 03(6280)5034

【振替口座】00120-8-57297

企画・編集 — 公益社団法人 日本水産資源保護協会

制作・印刷 — 株式会社 生物研究社